

ヒト社会

—— この不可思議なるもの

たなべ・ひでのり

1. 遺伝情報の役割

—— DNAがすべての主役か

リチャード・ドウキンスはたしかに、その話題作「利己的な遺伝子⁽¹⁾」の中で、興味ある見方を示してくれた。生物の行動すべての背後に、DNAの利己性が働いているというのである。生き物は自分を安全に保ち、子孫を繁栄させるために、努力して生きているという常識の見方から、一歩飛躍している。すべての主役はDNAであり、生命個体は利用される乗り物にすぎない。彼は、個体を一時的に使い捨ての生存機械 (survival machine) にすぎないとし、次の世代を作るための設計図と見なされていたDNAを、主役の座に押し上げてしまった。

「一つの落ち着いた緊張が、利己的遺伝子の理論の核心をかき乱している。それは遺伝子と、生命の根本的な担い手としての生物個体の体との間の緊張である。われわれは一方で、独立したDNA自己複製子という心躍るイメージをもっている。それは、シャモアのように跳びはねながら、自由奔放に世代から世代へと移り、一時的に使い捨ての生存機械に寄せ集められるものであり、それぞれ別個の永遠の未来に向けて前進しつつ、死すべき生物体を次々と果しなく脱ぎ捨ててゆく不滅のコイルである。⁽²⁾」(傍点は筆者)

R・ドーキンスの考えは一つの学説を提示しているというより、ある観点を変えた見方を提供している、それも歯切れよく。そう受けとめるのが妥当のように思われる。それにしても刺激的な面白い考え方だ。多くの人が影響を受けたと思われる中に、作家の池澤夏樹⁽³⁾がいる。

彼はいま文芸雑誌・文学界に、興味深い読み物を連載している。上述のドーキンスにも触れているが、筆者のこの小稿のテーマに関係するところを多く

含んでいるので、少し長くなるが引用しよう。

「実際さまざまな生物の多様な努力を見ていると、背後で操る遺伝子の策略という仮説はなかなか説得力がある。生物の長い歴史を俯瞰できる者がいたとすれば、彼の目にはつきつぎに乗り物を代えながら長い時間の旅をする遺伝子たちこそが主役に見えるかもしれない。ドーキンスは個体の身体だけでなく、かつて本能という曖昧な言葉で説明された動物の行動とその産物までも遺伝子の自己表現の一つにすぎないという。ヒトの造るダムは文化の産物だが、ビーバーが造るダムは遺伝子の表現なのである。

では、遺伝子の乗り物として、ヒトはどう間違っているか。ヒトの祖先が文化というまったく新しい方法で繁栄への道を歩きはじめた時、遺伝子たちはそれもいいと思ったかもしれない。長い首に依存して生きる動物や魚の真似をして海の中で生きる動物がいるように、文化という方法で生きるものに乗ってみるのも悪くないかもしれない。文化はDNAによる進化のシステムと違って応答が速い。異常に早いと言うべきだろう。したがって環境の変化には速やかに、しかも細かく応じられる。……しかし、文化というシステムにはとんでもない問題が隠れていた。あまり強力だったので、自己増殖し、本来の目的とは違う方へ暴走しはじめたのである。遺伝子の着実な乗り物だった筈の個体は今やそれ自身の快樂をもとめて乗客の意図を無視するまでになった。もともと遺伝子の命令が最も強く行き渡っていたはずの性という分野までが完全に文化の領域になってしまった。他の生物のニッチを圧倒して、地球全体の集合的な生命体の共存共栄というおだやかで美しい目的を危うくするまでになっている。しかもそういう事態に至っていることにうすうす気付きながら、強力なはずの文化は自分の動きを規制できないでいる。その力はおそらくヒトの文化そのものの中にはないらしい。……だから、ひとまず終焉を迎えるしかないということにもなるのだ。あるいは今、遺伝子たちはこの失敗作をとにかく行くところまで行かせて終らせるしかないと考えているかもしれない。他の種に多くの被害が出る前にこの暴走するサルが絶滅してくれないかと願っているかもしれない。進化の歴史には失敗に終って消えた種は少なくない。数百万年を単位に生きてきた遺伝子たちなのだから、一万年あまりを少し危険だがおもしろくもあった文化という実験に費やしたことを悔いはしないだろう。⁽⁴⁾」

「利己的な遺伝子」という作品も面白いが、この「サルとしてのヒト」と

いう表題の記述内容も示唆するところが多い。本能といわれるものは、何か。またヒトの性は果して、「完全に文化の領域」になっているのか。この小稿でも、それらの問題は必然的に取り上げる。

遺伝子DNAが主体との見方は啓蒙的だが、私見によれば、主役はやはり利己的個体 (selfish individual) である。その主体とヒト社会は、どのように関わってくるのか。莫大な文化をもつヒト社会の、どこに基本的弱点があるのか。ことばをもつ社会の、問題点は。それらを念頭において、いくつかの作業を試みる。

2. 本能と文化

たしかに、本能という表現には、あいまいなところがある。文化とかカルチュアの言い方にしても、文明とまぎらわしかったり、もっとひどい場合には、カルチュア・スクールなんぞを連想されたりする。

より正確には、遺伝情報と遺伝外情報とに二大別すべきであろう。遺伝情報はDNAによって正確に伝承され、個体毎に発現する。その中に、本能といわれるものも、高次の複雑なDNA指令発現であるが、はっきり含まれる。

遺伝外情報は、それ以外のすべてである。それは生得的なものではないから、生後試行錯誤によってある行動の仕方を個体自ら発見するか、それをグループのものとして生後学習して受け継ぐか、そういったものから成り立っていて、指令してくれるものはどこにもない。

この二つの用語をふりまわしていれば間違いはないのだが、やや長すぎるし、固すぎる感じもあって、ここでは本能と文化というありきたりの言い方も、安易に使っておく。繰り返すようだが、本能とは遺伝情報の一部であり、文化とは遺伝外情報のことである。

“チンパンジーのあり釣り” —ジェイン・グドー (ル) (Jane Goodall) の名を一躍有名にしたその発見は、“あり釣り” が文化行動だったからで、これが本能行動であれば、大して注目もされなかったことだろう。ニホンザルでも、幸島の“イモの水洗い” があって、これは最初にこれを習得した個体まで確認されている。いまでも外国の文献にまでのこる“IMO♀”なる個体名がそれで、それは当時2歳のメスザルだった。

本能と文化を対比させるのに、チンパンジーの“あり釣り” と、ガラパゴス・フィンチという小鳥のある生得的習性とが、都合よく比較できそうだ。

このフィンチ、紋次郎さながら、口にサボテンの長いトゲをくわえて、木の幹のくぼみなどにひそむ虫をつつき出して食べるのである。“あり釣り”の方も、木の枝を使うので、ともに道具使用で餌かくとくという点が似ている。しかし前者は、生後習得したもの、後者は生れながらに備わっている能力で、遺伝子の指令に従って発現したもの、ということになる。

文化がサル社会にも存在するとは、近年のサル学の成果である。セックス行動にしても、本能の赴くままには違いないが、ホカホカと名付けられたようなメスザル同士の性行動すら観察されている。サル社会にはかなりメンタルな要素が多いので、互いの緊張を緩和するために行われているらしい。ただしあくまでも文化的要素が、ここにも芽生えていると限定的に見るべきで、行動の意味を拡大して擬人化 (personification) の弊におちいらぬよう、気をつけなくてはならない。サル学者たちが、安易に、サルの性文化にレスビアンがあるとか、売春行為すら存在するなどとの記述を時折散見するので、その感を深くする。

本能はとりわけ昆虫の世界で、巧妙で見事な行動を形作った。それに魅せられたファーブルは、綿密な観察の記録を「昆虫記」全10巻にあらわした。よく知られているこの古典的労作は、また直接には読まれていないことでも代表的なものであろう。わが国の読者にしても、その絵入り抜すいか、児童向けのものかで垣間見ている場合が多い。しかし手近かなところに、文庫本20分冊で全訳出がなされていて、それは平易な文章で、予備知識なくて読することができる。

世間の評価と少し違って、筆者の見るその特色は次の通りである。①文中、“本能のもの知り”、“本能のもの知らず”のサブタイトルで示されるようなところがあるように、正確をきわめる本能行動も、少し条件が違えば、まるで無力化することがある。すなわち大きな変化にはついてゆけない、融通性のなさで、これもDNAの指令で動いているせいで、さすがの遺伝子も、すべての変化条件を読みとり、それに合わせるような変化技までは折りこむことができなかったことを示している。「本能の研究」⁽⁵⁾ というティンベルヘン (TINBERGEN) の有名な古典にも、その間の事情がでている。トゲ魚の威嚇行動、変愛行動 (mating behavior) がその例で、本能が単純な条件反応の連鎖になっていることが、如実に示されている。②それにしても、見事な行動を示してくれる、本能は。ファーブルの観察例もすばらしいが、後の代

になって出されたもの、フォン・フリッツ (von FRITZ) の解説した、蜜蜂の暗号まがいの通信などは、信じられないくらいのすごさである。

花の咲いている場所を発見した一匹の蜜蜂は、興奮して巣に戻ると、8の字のダンスを巣上で演出する。その8の字の1つの線が、見えない垂直の重力と為す角度 θ が、それだけが意味がある。それは、巣から見た太陽の方向と、巣から見た花の方角と、その双方のなす角 θ に等しい。つまりは、重力と太陽をよみ替えて、花の在り方を巧みにコミュニケーションしている。距離はそれほど正確に伝えていない。近ければ早く、遠ければゆっくりまわる。③ファーブルは本能がどのようにして形作られたかを自問し、それは生存競争、適者生存、自然淘汰といった進化論のフレームワークでは、到底説明できないと覚ったのである。この時点において彼は、進化論を明確に否定した。昆虫記が出版された当時においてこのことは、ファーブルの誤りないし時代おくれと見なされたようだが、現今ではその部分になるべく触れないように、そっとしてあるのか、または無視しているうちに忘れ去ったのか、そんなところだと思う。

筆者の考えを率直に言わせていただければ、ファーブルはおくれているわけでも、頑迷固陋なためでもない。彼は進化論のあまりにも単純な図式では進化の事実が説明できないこと、とりわけ精巧な本能は進化によって偶然につくり出される筈はないことを、はっきり指摘し、それによって進化学説への疑問提出、もっと適切な言い方をすれば、道化学説組み立て方についての、問題提起をしたのであった。しかし納得のゆく進化学説は当分出されそうにないところを見越して、神の創造を考えた。神秘的とも見える本能のすばらしさに、彼はそこにいかげんな説明ではなく、神の関与を感じたのだった。

物理学に位置の情報と言うのがある。重力や他の物質系からの影響をうける質点は、その位置にあるだけで多くのものを周りからうけとる。それを情報と言いかえれば分りやすい。

位置だけでもそれだれの情報をもつ、これはある意味で規制をうけることになる。まして多くの物質系・生物系が混在する中では、生物は多くの情報をうけとり、周囲からの規制をより多くうける。

進化はもともととも、自然界の法則に反している。熱力学の第2法則“エントロピー増大則”に対して、逆行しているのである。自然の状態は他から仕事をしかけない限り、エントロピー（無秩序）が増える。老いてゆくのも、

形あるものがすべて崩れるのも、それである。なぜ生物が出現し、逆行現象がおこったかは分らない。いま考えられることは、生物は努力して生きている、エントロピー増大則にさからって。そのことと周囲からの規制をフレーム (Frame) と考えれば、進化にある方向が出てくるのではないか。……この問題は筆者の能力を超えるので、これ以上触れない。

遺伝外情報の問題点については、以下に述べる。

3. ヒト社会を特色づけるもの

本能行動で成立する動物社会は、行動様式が厳格にきめられていて、それからの逸脱が見られない。だから整然としていて見事で、無駄も失敗もあまりなくて、見ていて楽しいけれど面白さやこっけいさは少い。サル社会の文化行動は例外で、しかしこれは遺伝外情報の、まだあけぼの時代を形作るにすぎず、ヒト社会の多彩で豊富なものと程遠い。

面白くて、多様で、ずっこけたり見事に失敗したり、時に残酷きわまりない面を創り出して当事者はそれでも平気なのに見る者や伝聞して知る者を十分こわがらせる、変化に富み、罪悪・美醜の万華鏡をとっぴり示してくれるのが、われわれがその渦中にあるヒト社会である。

一体これは、何なのか。この面白さ十分、制御のきかない暴走も平気な、ヒト社会の文化は、他に比較しようもなく特異なものだ。どのようにしてこんなとてつもないものが、ここまで育ったのだろうか？

答えの一部は、ことばの存在にある。コミュニケーション手段としてのことばの発達は、ヒト社会に特有なものである。

ことばがヒトに特有のものであっても、動物社会に本能を超えたコミュニケーションが存在しないと断定したら、誤りをおかすことになる。サル社会にも、親愛なるワン公にも、それら哺乳動物とヒトとの間にも、文化としてのコミュニケーションは存在する。あるというよりも、豊富に出現している。

一口に言ってそれは、ことばによらないコミュニケーション (non verbal communication) であって、伝える内容もかなりのもののだが、ことばによる場合 (verbal communication) ほど分析的でなく、明確性を欠くだけのことである。そのやり方は、これも要約した言い方をすれば、トータル・コミュニケーション (total communication) とでも表現すればいいのか、表情とか雰囲気とかそれらにプラス α の全体的なものである。

ヒトとペットの交流においても色々感ずることのあるのは、多くの人々の経験のあるところだが、これもうちこみすぎると、やはり擬人化の弊におち入る。分別もあり社会的にもその仕事ぶりを認められているさる先輩に個人的に会うと、いつも話題はペットの猫のことになってしまう。(因みに筆者はイヌが好きで、ネコ類はキャラクターとしてのFelix the cat以外はきらいときている)。先輩の話はいつもエスカレートして、「きみ、うちのネコはテレビを見て良く分るし、面白い場面があると笑うのだよ」とくる。それまで愛想よく相槌を打っていた当方も、ここにくるとぐっと受け答えにつまり、思わず、「ん?まさか」と言ってしまう。とたんに二人の間の親愛なる空気は吹きとび、相手はこちらをまるで不法侵入のエイリアンを見るような目つきになってしまう。(困るのだなあ、これ)。

本題にもどり、オオカミの子孫であるイヌは、やはり豊かなコミュニケーションをもっている。それはスメル・ブレイン (smell brain) という表現にあらわされるように、匂いの世界で、それに白黒だけの視覚世界が交っている。サル社会のそれよりももっと微妙なコミュニケーションで、分析したり、ヒトのことばにほん訳したりは、不可能だ。

さて、いよいよヒト社会コミュニケーションのフレームを形造る、コトバの登場である。文字の発明はおおざっぱに見積って5千年前、これで時間・空間を超えての伝達が可能となったが、なんといってもおそらく数万年におよびコトバの使用は、決定的な効果をもたらした。

コトバがどのようにして、ホモ・サビエンス (多めに見て10万年の歴史か) に獲得されていったか、その過程を調べることができない。人骨と違って化石資料もないからである。おそらく、ゆっくりと声の分化がはじまったのであろう。

しかし声帯的発達は副次的なもので、コトバの成立には、概念が伴う。それは抽象化能力を必要とする。太く大きい樹や、小さなもの、灌木類など、それらをひっくるめて木というイメージが共通に抽出されねばならない。それをどうネーミングしようとも (トロとでも、オバケとでも) 任意だが、その前提には高度の脳の働きが要る。

先きに「集合の集合⁽⁶⁾」考で述べたように、モノについての頭の中のイメージを、内包 (INTENTION) と外延 (EXTENTION) に分けた場合、その内包の共通部分を取り出す作業が抽象化 (abstraction) であって、高度

の脳的作用がなければ成立しない。

コトバがどれほどの威力をもっているか。それは文化の伝播一つを取ってみても分る。サル社会では、視覚言語 (visual language) しかないから、手間暇がかかりすぎる。イモの水洗行動一つを取っても、幸島の群れ全体にひろまるのに3年以上を要している。

ただしコトバは両刃の剣、危険な部分があった。いまわれわれはそれを、いやというほど思い知らされている、日常生活において。

シュークリームと言えば、目の前においしそうなシュークリームが意識の上に出現する。それがコトバの魔力、危険な部分の、La présence du non être (ないものをあるようにみせかける—これを非在の現前などとむつかしく訳す必要はないと思うのだが) とよく言われるものの正体である。

シュークリームぐらゐなら、罪がない。しかしこれが、愛とか平和・正義といった抽象概念になれば、どうであろう。国同士の戦争は、常に双方が平和のために正義実現のためにと唱えてきたし、愛しているよといいながら、平気で相手の首をしめることすらある。

“愛しているという言葉がどれほどいつわりを含んでいるか、間もなく彼は知るであろう” (山田詠美)なのである。

「初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。この言は初めに神と共ことばにあった。すべてのものは、これによってできた」(ヨハネによる福音書第1章、1～3)

これほど祝福されているコトバ、そして愛についても、聖句は数々の教えを垂れてる。

「愛さない者は、神を知らない。神は愛である」(ヨハネの第一の手紙、第4章8)、「神を見た者は、まだひとりもいない。もしわたしたちが互いに愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである」(同上、12)

神と同一と見なされるコトバに、内にいつわりの念をもって使用するとき、そして神と同じとされる愛についても偽りの心をもって言うとき、ヒトは禁断の木の実を食べる原罪を犯したことになる。そこに偽りの社会、体裁よく表面を取りつくる鍍金社会 (gilt society) が成立する。自ら創ったコトバに、身を切りつけられる仕末、このディレンマめつきから脱け出すには、どうしたらいいのだろうか。

4. “文化”はなぜ墮してゆくのか

大胆に結論を先きに出せば、それもこれもかの“エントロピー増大則”の為すわざである。

熱力学第二法則は物質系に例外なく働きかけて、熱平衡状態にもちこんでゆく。秩序あるものを乱れた状態に、無秩序へともたらず。他の物理法則と異り理論的に証明されたわけでもないのにこれは、経験法則として普遍的にその成立が確認されている。

筆者は物理の専門屋でないから、もっと素人っぽく大胆な言い方ができる。エントロピー増大則はいわば宇宙法則であって、生物も無機界もそれから脱れることができない。万遍なく絶えず作用して、すべてを熱平衡状態へ、秩序を失った方向へと、つき崩して行く。

しかしこの大法則を遺伝外情報ないし文化へ適用させて考えると、決定的な無理が出てくる。いくら普遍的な法則といっても、エントロピーが増えるというのはおよそ物質系に関わることであって、それを目に見えない、非物質系の、抽象世界の産物である文化に及ぼそうというのは、飛躍しすぎではないか。むしろ文化には作用しないから、それが野放図に暴走するのを防ぐことができなくて、今日の危機を招いたと考える方が分かりやすく、素直でいいのではないか。

ある意味で、エントロピー増大則に逆行している生物の存在と、それがより高度の進化を続けるということは、このきびしい法則を愛の鞭として切磋琢磨して昇ってきた結果と見ることができる。なにしろ物質系にしる生物系たくまにしる相互に入り交り複雑に影響し合い、その相互干渉の多元的世界の中に、フレーム (Frame) が形成され、エントロピー増大則に抵抗して逆行する生命体のエネルギーが、そのフレームを一種の鑄型として、相互関連して入りくんだ秩序のある生物体とその進化 (本能を含む) をなしとげた——こんな作業仮説 (working hypothesis) を前提として、いま考えを進めようとしている。なにしろ進化学説にあきたらず、さりとてフェアブルのように直ちに神の関与を見出すというのにも、与しないとすれば、こんな方向しかない。

さて、ふわふわとしてつかみよのない文化の世界は、この鑄型の埒外に合って、自由奔放に勝手に成長している、そう見なしてしまってもいいのだろうか。

ここでいまひとつ、ひねって考える。遺伝外情報ないし文化は、脳細胞の

産物である。出来上ったものは非物質系であっても、その成立の基礎には、ノイロンとそれらをめぐる電子との、どちらにしても物質系・生物系が存在する。この物質・生物系は、間違いなくエントロピー増大則の適用をうける。努力しても努力しても、つき崩されてゆく。

ヒトの脳は努力して、エントロピーを減少させ、新しい工夫・考えを生み出した。それらがヒト社会に共有され代々受け継がれてゆくと、それがヒトの文化である。

文化が生み出されたあと、それは非物質系であるから、ふわふわとして、エントロピー増大則にもつかまらない。それは自由気ままに成長発展をすることができる。愛の鞭とか鋳型とかが無いので、野放図にひろがる。

一方でひろがり発達する文化は、やはり脳細胞の働きが基礎にある。それはつき崩されエントロピーを増やす力の作用をもらうけるのであるから、いい加減な文化を生み出しやすい。でき上った文化には、物質的規制がない。だからそれは、素晴らしいものにもなりうるし、一方でとめどもなく墮落したのものにもなる。

いいものも出てくるが、墮してゆく方がエネルギー（ノイロンの働き）が少なくてすみ、楽である。文化は墮してゆく。“暴走するサル”と、ヒト社会のあり様を批判される結果となってしまった。

この状態を脱することは、可能だ。フレームとか鋳型がないから、文化の世界は自律して整えるしかない。みんなが努力して、エントロピー減少を、文化の領域に実現させればいい。自律社会の成立を旨ざすことだ。

それが容易でないことは、誰の目にも明らかだが、どこに問題があるのか。

一人ひとりを考える。文化は生後習得である。長い時間をかけて、ヒトは自分自身の文化・遺伝外情報を育てる。もとより他よりの影響をうけ、次第に育成され成長する。

で、その形作られた自分自身の文化をよりどころとして、判断してゆく。そこに注目すれば、個々人の文化を、照合系（system of reference）と考えることができる。照合系は固定のものではない。日々変化し成長・退化をするが、骨子となるものは成人後では変わらないと見るべきだろう。

照合系は低次のいびつなものに育ってしまうと、その形のまゝ拡大されてゆく。人は常にそれによって物事を判断するから、“下司の勘ぐり”のようなことも生じてしまう。

望ましいものは、照合系—レファレンスのシステムが早く固まってしまわずに、いつまでもしなやかで柔軟に、開放的で生長を続けるものであることだ。

このことから、社会に住む各個人は、大別して2つのグループに分れる。もちろん、両者の中間もあるのだが。

一つはthe establishedで、出来上った人というほどの意味である。社会人としても自信にあふれ、しっかりしていて、たのもしい。頼れば力になってくれそうだ。世渡りも上手で、社会のどの分野でも見られる、社会人として成功型である。

もうひとつのタイプは、これと反対のnon establishedである。いくつになってもしっかりしていない。頼れそうにない。よくつまずく。世渡りもおどろくほど下手で、the establishedが上手にスイスイ世を渡っているのに、こちらは、愚直に生きるしかない。

あなたは、どちらのタイプですか。数は前者の方が圧倒的に多い。

照合系で見ると、the establishedは、早く固かたまってしまい、どちらかという閉鎖系に近い。

non establishedの照合系は、これと対照的にオープン、開放型で、性格的にもこだわりがない。いつまでも未完成・未熟で、世間の荒波や冷たい風にさらされ、世渡りがごく下手ときているから、しょっ中ずっこけながら、それでも明るく生きる。彼の心は自由だ。自分の足を引っ張る人間をも、憎まずに愛することすらできる。

できたら、the establishedの方が楽でいい。しかし人をおしのけ自己主張を貫き、それでいて心が安住できないところがある。

non establishedに捧げたい言葉がある。“Without a hurt, the heart is hollow.”（傷一つ無い心は虚ろな心）—ある米詩の一節。“浮生の悲哀は、躓きながら、生活に立ち向ってゆく人間でなければ分らない。”（芝木好子「黄色い皇帝」）

5. ヒト社会とセックス

— 本能+αのこの怪物

パンダの繁殖のために、パンダのオスメス性交場面をビデオにとり、一向に発情しないパンダに見せたことがあるようだが、彼等は何も感じなかった。

サル社会相手にこんな愚行を試みた例はないが、もししても、結果は同じだろう。

動物社会の性行動は、厳格に本能に従っている。それは繁殖のために、DNAが主役ならばその順当な継続のために、一定の時期にそれぞれの種に特有の方法で行われる。

ひとりサル社会だけは、文化行動が入りこむために、その性行動にもメンタルなものが入りこんでくる。繁殖目的以外にも、性的行動が見られるのである。

食物を前にして緊張するサルたちは、その気分を和らげるため、メス同士が性器をこすりつける（ホカホカ）行動が観察されている。また餌を目前にしてあまり空腹でない上位のオスザルと下位のサルがいる場合、餌を下位のサルが取ることを許す前提として、マウンティング、性交、毛づくろいなどの手段が使われる。マウンティングは下位が上位にお尻を向けてマウントさせる、順位の確認で、おべっかみたいなもの、性交をさせる、毛づくろいをする、何れも下位ザルのサービス提供で、サル社会はことほどさように、メンタルな要素が多く入りこんでいる。

サル社会のセックスで、意外なことが今一つ発見された。インセスト・タブー（incest taboo）がある部分成立しているのである。乱交ではないのだ。少くとも母ザルとそのオス子ザルは、生長後も性的交わりをもたない。ヒトの文明社会では、この近親相姦の忌避がいとも簡単に破れる例を見ると、ある感慨をおぼえる。

ヒト社会のセックスは、どうか。

やはり基本に本能がある。ただその上に生後獲得するメンタルな要素が、サルとは比較にならない位大きくかぶさっていることである。

本能+ α の α が大きすぎて、それは怪物さながらで、人によりいろんな変相を見せる。

個人差も大きい、ヒトのセックスは、性的衝動だけでなく、繁殖目的をはるかに離れた、後天的文化要素が大きい。だからヒト社会に限り、ポルノ産業が成立する。

それは文化一般がそうであるように、つまりよいものも、劣悪なものも野放図に、ともに生ずるように、脳で感ずる性感が、脳の生み出す文化によって、大きく変更されるのである。

分りやすく言って、よい部分にもふくれ上り、悪い部分にもふくれる。具体的には、本能的性欲が、愛を高める手段にもなりうるし、変態、レイプなど苦しみの根源にもなり得るのである。よい方にも悪い方にも、自在に動く。

性教育書の一部に、男女性器の詳しすぎる解説や、オナニー奨励ともとれるような記述が見られるが、疑問を感じず。

生徒も社会人も、ともに認識したいのは、人それぞれの心がけ次第で、セックスは愛の高みにも達し、相手へのいたわりと愛があふれ、動物社会の体験し得ない愛の発現となりうること、反対にいつでも苦しみと悲劇のもとに転落しうる、魔法の剣みたいな存在、それがヒトのセックスということで問題はそれにつきるのではない。

次に婚姻の形態について、サル学者は性急にサル社会の分析から直接にヒト社会の起源に迫ろうとする。その意気ごみはいいのだが、ヒトの古代社会の実証的研究に目もくれずに、サル社会の性生活からいきなり一夫一婦制への移行を論じたりする。そこに無理がある。

先人の研究によれば、現在文明社会に普遍的に見られる一夫一婦制は、ヒトの歴史から見て、非常に新しく、それは私有財産制とともに発達したとみられる節がある。

社会を古い時代にさかのぼるほど、男女の結びつきはゆるやかになり、あるグループの男性は社会的に兄弟（ブラザーズ）と見なされ、あるグループの女性はこれまた社会的に姉妹（シスターズ）と見なされる。この両グループの間は、性的結びつきが社会的に容認されている。これは乱れているのではなくて、男女の結びつきがゆるやかに伸びやかになっているのである。

この古代社会の知識は、ルイス・ヘンリー・モルガンの古典的名著「古代社会⁽⁷⁾」に負っている。彼は1世紀前に活躍した人だから、まだ古代社会の掟や面影を残していたインディアン部落に入りこみ、その部族の一員として共に生活する貴重な体験をもつことができた。かくて得られた実証的研究を、「古代社会」にまとめて著した。

あるとき筆者は、文化人類学方面のさる高名な碩学から、「きみはまだそんな時代おくれの本にしがみついているのか」と言われ、おどろき、それを契機に、この古典の不評判な理由を調べてみた。

前から気になっていた部分だが、1ヶ所だけ問題のところがある。モルガンは実証的研究に終始しながら、性の結びつきが古代にさかのぼるほどゆる

やかになるところから、遠い過去のヒト社会は、「血縁家族」の時代があった、言い換えれば乱交時代があったに違いないと見込みを立て、それを堂々と書いてしまったのだった。

惜しい、千慮の一矢。そんな古い時代のこと誰知るまいと思いきや、である。先ほども触れたが、近ごろサル学の発達でサル社会にインセスト・タブーが一部成立していることが認められた。そうすると、サル社会よりもメンタルな要素の多いヒト社会では、どれほど太古の昔であろうとも、当然近親交わるのを避ける文化が成立していた筈だ。

その他の部分まで、この古典を時代おくれよばわりは酷というものであろう。彼は生き生きと実証的に、平和で民主的な社会を描き出している。権力のないリーダー普通酋長（戦争中だけは臨時に軍事酋長をおしたてる）、とうもろこしを主とした豊かな植物栽培、一人ひとり自分の行動と言葉に責任をもっていたその社会。牧歌的で、いいなと思う。

本書は出版元のアメリカで、ずっと絶版になっている。その理由は、エンゲルスのこれも古典的名著「家族・私有財産・国家の起源」のせいであると思う。

エンゲルスはこの本のはじめのところに、種本はL. モルガンの「古代社会」であると明らかに断り書きを書いている。良心的なことだ。（わが国の婦人運動家がまるでバイブルのように崇めるベーベルの「婦人論」の場合など、何のことわり書きもない。しかし一読して明らかだが、ベーベルのこの本、エンゲルスのものの焼き直しで、セコハンものである）

エンゲルスの良心が、ひいきの引きたおしになった。アメリカでは一般にエンゲルスのこの古典を、マルキシズムの教本と見なしている。十把ひとからげにL. モルガンまで、きらわれてしまった。フェアな態度とは思われない。

6. 縁故社会

われわれは西欧社会がぐりぬけてきたような、市民革命と産業革命を、本来の意味では体験していない。その体験がいいとかどうとか言っているわけではなくて、わが日本列島の歴史的事実がそうになっている。われわれは、なにもかも一緒くたにして、中途半端に、明治維新以降、ごっちゃに受入れた。

われわれは、縁故社会の中に生きている。それは市民社会の成立と、少しくニュアンスが異なるものがある。

話が急に飛ぶようだが、現今の社会保障システムも、その創まりはそう古いものではなく、高々100年の歴史でしかない。“すべて国民は、健康で文化的な生活を営む権利を有する”（憲法第25条第1項）。この考え方はヒト社会がようやく到達したところのものを、あらためて明記している。しかしこのような現代の考え方は、せいぜい百年ぐらいの歴史でしかない。歴史時代に入ってヒト社会は、階級分化・不平等社会を長らく数千年の間、体験してきた。先史時代は、L. モルガンが描いたような民主的・原始共産制的社会で、こちらの方が数万年の長い歴史をもっている。

西欧社会は長い年月をかけて、個人の尊厳、民主的社会的思想をはぐくみ育ててきた。時にはそれは市民革命となってほとぼしり、また産業革命の社会的大波もくぐりぬけてきた。

救貧法（Poor law）も結局役に立たないことが分ったとき、人々は現代の社会保障への道を急速に歩みはじめた。それは資本主義の下で、所得の再配分的意味合いをもっている。社会主義体制70数年の試みが稔らなかつたいま、われわれの選択はこれしかないことになる。

まず個の確立、個人意識、それが西欧社会の根底にある。わが国ではそこまで徹底しきれない。根底にあるのは東洋的な全体を大事にし、個人的欲求にはまあまあでおだやかに処理したいと願う。

身近な例で、乗り物の中とか街中ですれ違って体が少しでも触れたとき、西欧市民社会では双方からパードン（失礼）の言葉が自然に出る。われわれの場合はどうか。

知り合い同士が町中で出会えば、何度も頭を下げ合う礼をつくし、うやうやしい。知らない間柄では、縁なき衆生といった感じ方になっているのではないか。

個が確立すれば個と個を結びつけるエチケットなり、必要なときのヘルプが出てくる。個が確立していない社会では、家族、縁者、知人と、かねてつながりのある人間関係は大事にするが、知らない人間間のつながりには関心がうすいことになる。

個と個が容易に結びつかない縁故社会では、知らない者同士が一つの組織に入れられたとき、先にその組織に入った先輩と新たに加わった後輩とが、

きびしい上下関係で律されてしまう。新たな平等対等の関係をつくることには、苦が手と感ずるので、このようなことになる。学校の先輩・後輩関係の上下的きびしさ、また今は消滅したが、わが国の旧軍隊組織にもそれが見られた。古参兵と新兵との絶対的上下関係で、私的制裁といわれるイジメがそれに加わる。

われわれは縁故社会のただ中であって、とっぷり何らかの縁故関係にはめこまれて、社会生活を送っている。学校の同窓会、県人会なども各地で盛んであるし、旅行会、ゲートボール仲間もいるだろう。なにかの縁に結びつかなければ、個が社会を形作りにくいとの潜在意識があるようだ。

縁故社会もほんわかとして、悪いとはいえない。しかし個と個がドライに対等にいつでもつき合える市民社会が確立されなければ、暮しくい面がいろいろ出てくる。

一寸旅行したい場合でも、旅行社に知人がいれば（その縁故によって）大層便宜をはかってもらえる。病院を利用する場合もそうだ。だから人々は僅かのつて（縁）をもとめて奔走するし、得た縁故的つながりを大事にする。

しかしこれでは不便で、のびやかな市民生活とは言えないのではないか。

アービン・シュレーディガー教授に、そのスペース・タイム・ストラクチャという著書に関連して、昔問い合わせの手紙を書いたところ、折り返し長文の手書きで丁寧に詳しく、当分の疑問点に答えて下さった。見ず知らずの間でも、個人的市民社会の考え方が確立していれば、直ちに躊躇なく結び付きが、あっさりとも可能になる例だ。わが国の場合はどうか。研究資料を手紙をつけて送っても、相手が未知の人の場合、殆んど無視される（今西錦司氏だけは例外だったが）。

ぬるま湯につかっているようなある意味では心地よい縁故社会から、やはりわれわれは脱皮して、個と個の任意対等のつながりをもてる市民社会へと移行したいものだ。その方が市民生活が、便利というものであろう。縁故のつながりを大事にする現在の社会風習も、そのいいところを残しておけばいい。

これらの現代社会を超えて、時折想いは遠い古代社会へとただよう。1万2千年前、まだ氷河期（ヴェルム氷期が1万年前に終わったばかりの、われわれはその後氷期1万年程のをさばっているにすぎない）が終わっていないので、新旧大陸を距てる激しい潮流のにベーリング海峡が干上って、ベーリン

ジア大陸と名付けられるものが存在した。われわれの直接の祖先である（先史）モンゴロイドは、そのベーリンジアを踏みしめ、動物を追いながら新大陸へと移動していった。

1千年ほどで移住と定住をくりかえしながら、この先史モンゴロイドつまりアメリカの先住民族であるが、南米の南端に達してしまった。以来1万年あまりを、この広大な豊かな大地で、彼等はL. モルガンの描いたようなどこかで平等な社会生活を送っていた。——500年前ヨーロッパ勢がコロンブスを先頭に、おしよせてくるまでは。

L・モルガンが描いていない、古代社会の汚点のようなものも今日明らかになっている。部族間の戦争がよくあったし、戦争ほりよの肉を食べたりした（カニバリズム—それは儀式的なものにすぎないとの見方もあるが）。もっとはっきりしていることは、大型哺乳動物の虐殺である。生活のためでなく、ヒトは新旧大陸で、スポーツのように獲りをたのしんだ。マンモス・鹿など谷底に追い落して殺したと思われる、その跡が残っている。ウマは新大陸でのみ進化した哺乳類だが、絶滅させられて、僅かに一部が旧大陸にのがれた。

文化はいつの時代でも、よくも悪くも、どちらにでもできる。その双方を含んでいるのが、ヒト社会の文化である。先にも見たように、文化の世界にはチェックが働かないので、エントロピー（無秩序）が下手をすると野放図にひろがる。

一人ひとりが努力して、ヒト社会文化のエントロピーを減少させるしかない。幾何学と同様に、他に王道はないのである。

あとがき

ヒト社会——その分析は筆者にとって、いつまでも解を得ることのできない永遠のテーマであるが、どうしてもこれから目をそむけることができない。従って孤独な研究を、ライフワークとして続けている。残念ながらびったりした研究書が、未だ見出しえないから、自分で手がけるしかない。

本稿は作業途中の、いわばスケッチであって、未完の未熟なものにすぎない。

自分がそのただ中に住むこの不思議な社会——そういませんか？——を、その分析と解明をこれからも続けてゆきたい。いろんな方面の研究者の方から、大局的な示唆をいただければ、とひそかな期待をいただいています。

注

- (1) リチャード・ドーキンス「利己的な遺伝子」、日高敏隆外訳、1991年2月紀伊国屋書店、原題、Richard Dawkins, THE SELFISH GENE, 1989, Oxford University Press
- (2) (1)に同じ、P. 374
- (3) 「タマリンドの木」という作品に魅せられ、筆者はこの作家を注目するようになった。同じ恋愛小説でもこれは、山田詠美や渡辺淳一あたりのものと違って、強烈に生が躍動している。
- (4) 池澤夏樹「サルとしてのヒト」、文学界'92・11月号
- (5) N.ティンベルヘン、永野為武訳「本能の研究」三共出版(N.TINBERGEN, THE STUDY OF INSTINCT, OXFORD, AT THE CLARENDON PRESS, 1950)
- (6) 拙稿『『集合の集合』考』—指文字から数学の基礎へ、梅光女学院大学論集第16号、昭和58年3月
- (7) L. H. モルガン著、青山道夫訳「古代社会」上下、岩波文庫、外に角川文庫にも同様の全訳がある。原典は、Lewis H. Morgan “ANCIENT SOCIETY, 1877”